

あの日あの頃 - 13

大野良子

同窓会の幹事の方から「あの日あの頃」ということで原稿依頼を受け、また、写真もほしいということが書き添えであったので、写真さがしから始まった。日頃だらしな私、写真の整理などまわたくしておらず、家族の写真や学校関係の写真が、あっちに少し、こっちに少しとある中をさがし、やっと出てきたのが、この写真である。(あらなつかしい。)と、ながめているうちに少しずつあの日の頃がよみがえってきた。

今から、十数年も前になるが赴任して四年目であった。記憶にまちがいなければ、この年の四年生が、伊豆の白浜から安房小湊に移った一期生だと思う。この年は、出発した日と、帰ってきた日が晴れて、現地にはいた中二日、つまり生物の採集と観察していた間は、ずっと雨だった。したがって岩場はすべり、ステン、ステンの連続で、保健室に来るほとんどの患者は、青あざの治療だった。もちろん、先生方も子供同様ころんだ。夜のミーティングの時に、当時の杉村校長様が、「私はころんでないわ。」と、おっしゃったのに対し、山口先生が、すかさず「あら、私もよ。校長様は傘さして岩場に立っているだけですから、論外です。」と、言い大笑いしたのをおぼえている。確か私もころばなかったと思うが、はいていった G パンと、短パン(これは単に G パンを切ったもの。シスター達に珍らしそうにされてはすかしかった。)しかもっていかず、着るものに困ったので、これはまちがった記憶かもしれない。

昼は雨の中、ホテルの海岸を行ったり来たり、夜はミーティングの後、夜尿症の子供を起こしたり、先生達と盛り上がり、三日目、さすがに若かった私達も疲れ、子供達が学習班で生物の観察をしている時、そばのベットで昼寝をしてしまったこともあったが、子供達は、よくまとめていたので、(子供はえらい!!)と思ったものだ。

また、夜おそく(就寝近く)海に人影がある。どうも子供のような。海におちたら大変と、あわてて外に出てみると、やはり星美の子である。おどろいたが、とりあえず理由を聞くと、急に生き物がかわいそうになり、海に返すことにしたということである。危険ではあるが、昼寝のこともあるし、動機としては純粹なので、注意だけで、部屋に返した。

この年には、新卒の体育の先生が赴任してきた。大石先生といって、今は、静岡で主婦をなさっているが、確か私のクラスの副担で、彼女と一緒に夜の見まわりをした時のことである。Eちゃんのお母さんから、夜、起こしてほしい旨を聞いていたので、私達二人は、確か午前一時すぎだったと思うが、彼女を起こしに言った。彼女は、私達の声で、パチッと目を覚まし、ドアの方にゆくが、どうもおこされた意味がわかっていないように思えた。そこで、

「Eちゃん、トイレにゆくのよ。」

「あっそう。」

「トイレはここよ。」

「ウン。」

トイレの前でわけがわからない顔で立っている。

「どうしたの。」

「わからない。」

「何が?」

「どうやってするの。」

私達はしょうがないので、トイレの中で実演してみせた。

「わかったやってみる。」

とニコッと笑い、トイレに入った。私達二人は、トイレのドアの前でころげまわって笑った。朝、Eちゃんは、トイレのことをまるで憶えていなかった。私と大石先生は、それ以来「うんやってみる。」といっっては、ゲラゲラ笑ったものだった。とにかく担任としてはじめて行った合宿は無事終わってよかった。あの頃を思い出すと、なんともんびりしていたなあとつかしい。私も若かった。よく怒ったし、よく笑った。悲しくても、うれしくてもよく涙を出した。若気の至りと少々はすかしく思う。

【同窓会報、第13号・平成6年1月1日発行・から転載】